

【体育科】教科提案

生き生きと動いて学ぶ附属っ子

～子どもの言葉による授業づくりによって～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

2年目となる学校提案「問い続け、学び続ける子どもたち」であるが、今年度はサブテーマとして「子どもの言葉でつくる授業」を設定している。これは授業において「子どもの学びの筋」を大切にするという視点からのものである。

そこで今年度、体育科の研究テーマを「生き生きと動いて学ぶ附属っ子～子どもの言葉による授業づくりによって～」とした。それは昨年度の実践において、個やグループの変容の前には、学習内容と子どもの間に「子どもの言葉」が大きく介在していたことから、「子どもの言葉」をもとに授業づくりを進めることが、研究テーマ「生き生きと動いて学ぶ附属っ子」の実現につながると考えた。そして体育科では研究テーマのキーワードである「問い」を運動に出合い取り組んだときに感じる、新しいものへの意欲やできないことへの気づきであるとし、「学び」を問題解決への取り組みであると設定した。そして「子どもの言葉」は、ふりかえりの記述や活動の様子、表情、態度などと考えている。

またこれまで本校体育科では、体育科における学びを「運動のおもしろさを自分のものにしていく営みそのもの」とし、佐藤の「3つの対話」を授業に取り入れ、カードへの記述内容をもとにして授業づくりを行ってきた。それによりある程度の成果を得ることができた一方で、学びの過程で感じる楽しさや喜びを経験できていないと思われる子どもの姿も時折見られた。鹿毛によれば、こうした要因が「学びと自分との間に調和のとれた接点が結べない」からであるとしている。つまり目に見えたり、耳で聞こえたりする言葉以外にも、学びと自分との間に介在する「言葉」が存在しており、それをみとり、支援することが必要であったと考えられる。

今年度は子どもの学びを探る手立てとして、形ある言葉に加え、表情や態度など形のない言葉も注意深く読み取って体育の学びを進めていきたい。

(2) 体育科でめざす子ども像

- 1：体育の好きな子
- 2：運動が上手にできる子（やった，できた！）
- 3：運動の構造的特性について考える子（あっそうか，わかった！）
- 4：仲間とともに力と心を合わせて運動を楽しむ子

年間を通して上記の子ども像をめざしていく。具体的な姿を以下に述べる。

1の「体育の好きな子」を言いかえるとすれば、毎時間の体育が待ち遠しくてしかたないといった子のことである。笑顔で元気いっぱい走る子、夢中になってボールを追いかける子、そんな姿がめざす子ども像の一つである。

2の「運動が上手にできる子」とは、思い通りに自分の体を動かすことができる子、取り組

む運動の技能をもった子のことである。体育科において、技能が重要な学習内容であることは明確である。また技能の獲得は、更なる意欲と課題意識を生むことから、体育科の学びを成立させるために上手にできるようになる子どもの姿をめざすことは欠かせない。「上手にできない」運動が「できた」ときの喜びは、体育独自の感覚であり、その経験は運動場面における自己肯定感につながっていくと考える。

3の「運動の構造的特性について考える子」とは、運動にじっくり向き合い、その運動についての構造について考えられる子のことである。自分の体の動きを意識して運動する態度や、例示された動きや友だちの動きと自分とを比較する態度などは、運動場面で出合う様々な課題を解決していくために必要な資質であると考えられる。

4の「仲間とともに力と心を合わせて運動を楽しむ子」とは、仲間とともに記録の向上をめざしたり、よりおもしろくしたりして運動に取り組む子のことである。体育の授業では、友だちと意思を交流し、意見を聴き合う中で、自分やグループの成長や新たなおもしろさが実感できる体験を積んでいけるようにする。

上記の子どもの姿をめざすために、学習場面では個やグループの「問い」を言葉からさぐり、言葉を駆使して「解決」に向かう体育の学び方を、意図的・計画的に身に付けさせていく。

2. 体育科における「問い続け、学び続ける子どもたち」

体育学習において子どもたちが問い続け、学び続けることができるということは、「問い」と「解決」が3つの対話によって螺旋状に連続で生じることが必要であると考えられる。具体的には、多様な動きをつくる運動遊びでは、「もっとおもしろくするには？」→「器具（人数）を工夫したらおもしろくなった」→「違う場でもこの器具（人数）でやってみたらどうなるだろう？」などや、ゲームでは「強いチームの特徴はなんだろう？」→「ショートパスをいっぱいしている」→「チームでショートパスをつなぐにはどう動いたらいいかな？」などが考えられる。

以下の表は、学校提案にある具体的な姿に照らし合わせたものである。

<p>①学びを追究する子ども</p> <p>○楽しみ方や体の動かし方を身に付け、さらにおもしろくなるような工夫をしていく</p>
<p>②他者との関わりを大切にしている子ども</p> <p>○友だちとともに、運動がもっとおもしろくなるように話し合う</p> <p>○友だちの運動の仕方や考え方などを取り入れる</p>
<p>③学びを実感している子ども</p> <p>○学んだことを学習カードに書いたり、友だちに伝えたりする</p> <p>○学習カードや掲示物から自己の変容を実感する</p>

(1) 実践事例

校内研究授業で見られた問い続け、学び続ける子どもたちの姿

低学年 実践：器械器具を使つての運動遊び ～めざせ！2Cにんじゃ！～

本実践における主張点は「にんじゃになりきって『忍法』を考え、動きづくりを楽しむ学習過程により、器械・器具を使つての運動が内発的、連続的に動機づけられる。」である。

考えた忍法ができるように、器具を変更したり追加したりできるようにした。またその忍法が学級に広がるように、忍法を書いたカードや写真を掲示したり、忍法を発表する機会を設けたりした。

図1はAが器具の工夫について書いた水色のカードである。「マットがほしい」という訳をAに聞くと「とびおいた後にでんぐりがえしがしたい」との返事が返って来た。ここまでの学習では、跳ぶ、転がるなどの「一つの動き」について広がりや変化が見られたが、「動きを連続させる」発想はあまり見られなかった。そこで次時の学習課題を「連続忍法をしよう」とし学習を進めた。その中でスムーズな連続ができるようにと、手を前に出したりする動きの工夫や、場を縦に長くする工夫が見られた。

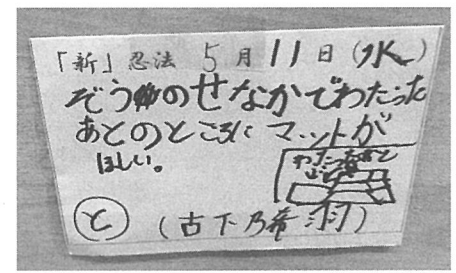


図1 (水色のカード)

そして「連続忍法」の後は、跳び下りながらリングを輪投げのように投げて遊ぶ様子から「忍法を組み合わせよう」とした。跳び下りながらフラフープでなわとびをする動き(図2)や、多目的ボックスに滑り込み、台上前転のような動きで降りる姿も見られた。



図2 (忍法の組み合わせ)

本実践では、子どもが意欲をもてるようワクワクする場を設定し、さらにある程度はその場を変えてよいことにしてきた。そして「問い」が生まれたのを見逃さないように、子どもが運動する姿やカードを丁寧にみとった。当初は「一つの動きの高める」学びの筋を想定していたが、子どもの言葉(姿、カードなど)から「連続」「組み合わせ」といった学びの筋を設定することで、問い続け、学び続ける子どもの姿がみられたと考える。

高学年 実践：ゴール型ゲーム「6B送球(ハンドボール)～ねらえ!かわしてシュート～

本実践の主張点は「シュートをどの子も味わえる学習の工夫によって、意欲をもって活動し、どうすればゴールにつながるか思考を深めていくであろう」である。そのために、①シュートが入りやすいように、ゴールを縦190cm横340cmと大きくした。②運動に対して苦手な子が周りの声かけによってシュートできるように、2グループをバディチームとした。①については、単元後半で小さくすることも考えていたが、なかなか全員シュート・ゴールまでいかなかったもので、そのままの大きさであった。一部の投力のある子のシュートも目立ったが、どうやって防ぐかを話し合う中で、図3のカードのようなキーパーの動きに気づき、また動きもすばやくなり、ボールをはじくようになった。②については、初めは「ナイスシュート!」「ドンマイ」などの声が多かったが、図4のカードを紹介することで、バディチームがどんな声をかけるとシュートにつながる動きになるのかを考えさせることができた。

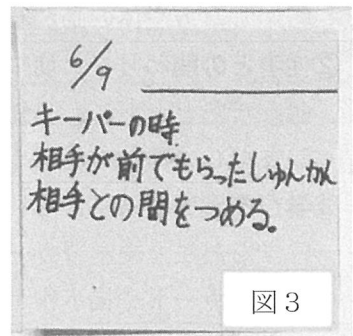


図3

本実践では、バディチームからの声かけで、シュートにつながる動きができ、全員シュートをうつことができた。

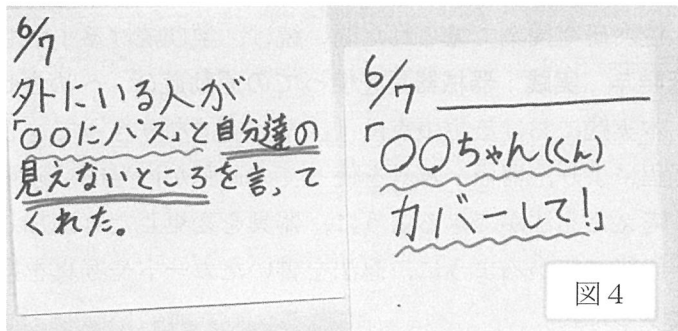


図4

これらの積み重ねにより、運動が苦手でなかなかシュートをうてなかった子が、シュートをうつようになり、単元最終日にゴールを決めることにつながった。
(図5)



3. 研究の展望

一人一人の学びを導く重要なポイントとして次の3点が考えられる。今後の研究の視点としたい。

(1) 単元で取り上げる運動の「おもしろさ」をはっきりさせる

運動に親しむ子どもを育てるためには、子ども自身がまず運動のおもしろさをわかり、運動をやってみたいと思えなければならない。つまり「いま、ここにいる子ども」からみて、何がおもしろいのかをみとり、課題の設定や学習過程を予想していく。

(2) 子どもが輝く瞬間をみとる

「わかった!できた!」「もうちょっとだ」と、子どもの「気づき」や「こだわり」を表現した瞬間を逃さずに子どもたちと関わり、発見や発想を一緒に楽しみ、味わうようにする。それは「言いたい!」と他者に向けて表現する場面であったり、「やってみたい!」とお尻が浮いた瞬間であったりする。この瞬間のみとりと支援の積み重ねにより、さらなる意欲を育てていく。

(3) 「子どもと教師」「子どもと子ども」の共同的な学びによる課題の解決を図る

課題の解決に向けた学習場面において、友だちの動きを観る場を設定する。そして学習カードに記入した内容を伝える場を設け、話し合い活動における言語的な相互作用を重視していく。また「ねえ、どんな風にしたの?」「ここどうするの?」という問いかけによって、運動のポイントを共有し、友だちの動きを自分のものにしていけると考える。

4. 研究の評価

一人一人の子どもが「単元の中でどのように問いをもちつづけたか」に視点をあて、研究を繰り返す。方法としては、学習カードの内容と支援の方法を照らし合わせる、実際の活動の様子を映像により繰り返すなどをして、単元における個や集団の変容をみていく。そこから、みとりと支援が適切であったか、子どもたちはチャレンジし続けることができたかを判断することができる。また「態度測定による体育授業診断法ⁱⁱ⁾」を用い、主観に頼らず客観的な分析も行う。

i) 子どもの姿に学ぶ教師—学習意欲と教育的瞬間—鹿毛雅治 (2007) 教育出版株式会社 21 頁

ii) 態度測定による体育授業診断法 梅野圭史・辻野昭(1980)「体育の授業に対する態度尺度作成の試み—小学校低学年児童について—」体育学研究 第25巻第2号 139-148 頁